

米英に對する宣戰の詔

書 (謹載)

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戰ニ從事シ朕カ百僚有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ衆庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ抑々東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ不顯ナル皇祖考不承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ幸々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ヲ借ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ヲ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト贊端ヲ開クニ至ル洵ニ己ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府並ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レメス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス爾ハ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ增強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通航ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌ラタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲斷然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ

御名 御璽

皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有衆ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

對米英戰の意義

學長 神戸 正雄

皇紀二千六百年十二月八日を以て、日本と英米との戦争が始まった。此戦争こそは世界の歴史に一轉機を劃するものであり、日本の興隆の出發點であり、有色人種頭の礎石となるべきものである。皇國が事變處理と、東亞共榮圈の確立と、歐洲戦争の東亞波及防止と三大方針を以て米國との間に外交交渉をば隱忍諒讓の態度にて續け來つたのに拘はらず、米國は此を認めやうとはせず、獨善的な架空の原則を固執し、皇軍の全面的即時撤退と蔣政權以外の支那に於ける政權の否認といふ如き、我國の到底認めることの出来ないやうな、皇軍の四年半に亘る戦果を無視する所の要求を飽迄も押付けて來た。我國としては遂に堪忍袋の緒を切らして宣戰するやうになつたのは無理もなきことである。今度の戦争 は相手は英米といふが實は米國が眞の相手である。英國は今では米國の附屬國であり、米國の蔭に匿れて其助によつて日本に當つて來たのである。蔣政權亦然りて、此も既に支那に於ける要衝をば凡べて日本の手に押へられて居るに拘らず、尙ほ今も抗日を續けて居るのは、全く英米、特に米國を頼りとして居るに外ならぬ。即ち我國の當面する支那事變の處理は此支柱たる英米をば東亞より追出すことなくしては出来ぬといふことが明かとなり、事變處理の最後の仕上として英米戦を初めなければならぬやうになつたのである。米國は一方からいへば、まだ東亞にてはフイリツピンを領有するといふことはあるが、支那に於ける利權は大したものでなく、何にも日本の支那進出から大し

Table of contents for the 59th issue, listing articles like '對米英戰の意義' and '世界史の一轉換' with authors like 神戸正雄 and 岩崎卯一.

た經濟上の損失を被むるほどの心配はない、支那の爲めに日本に戰爭を挑むほどの理由はないのである。

ただ支那といふものの未來の經濟上の發展に着眼して、此にて將來の地盤を作りた、其の爲め日本を驅逐しやうといふのと、今一には日本が近頃主張する東亞共榮園の中に、米國にて缺乏し其れからして供給を仰がなくてはならぬ所のゴム、錫、キナ等の重要産物を確保したいといふ希望と、其れに兎も角既にフイリツピンといふ屬領を有し、之を確保する面目問題とがあつて其等の經濟上政治上の理由から我國の正面に立つて其進路を阻止しやうとするのである。しかし此等についても日本と事を構へず、平和の間に其利益を進めることもしやうとすれば出来るのである。

然るに日本に對して上段から日本に命令するが如き態度にて自己の定めた獨善的原則を日本に強おやうとして來たのは此は一には日本の實力を侮り、特に日本が四年半の永きに亘りて戦ひ、最早此上戦ふだけの餘地なしと見たのと、今一つには自力の富力と、其から現に有ち將來にも増加し得べき

裝備の巨大 とに於ける自負心からして、日本に對し徹頭徹尾、讓歩せず、飽迄攻勢に出づれば、日本は戦はずして屈服するものと見たからである。

此暴慢なる米國をして、能く東亞の事

態を認識せしめ、日本の立場を理解せしめるのは外交によりては最早到底望み得ず、戰爭によるの外はなかつたのである。

元來、日米の關係は久しい以前から満足のものではなかつた。ペルリの來航からして既に侵略意圖を有つて居つたのであり、日露戦後には日本が取得した滿鐵をば我物としやうと企てたことがあり、日本移民の排斥問題を生じたことがあり、世界戦後には、山東還附、日本海軍々縮の強要などの主動者たりしこともあり、日支事變初まつてからは屢々我方の戰爭の邪魔を爲し、益々、蔣政權の援助を増強して、事變の永引きと、日本國力の消耗とを策し、特に資金凍結、貿易禁制によりて經濟戰を我方に挑んで來て居るのである。而かも今日まで日本は米國に對しては謙讓の態度を續けて忍び來つたものであり、其爲め却つて彼をして日本組織し易しと感ぜしめたのである。

既に事此に至つた以上は、國民は總力を擧げて此強敵に當らなければならぬ。戰の第一着手は幸にして我方に有利であつたが、敵は何分にも資源豊富にして、科學的裝備の整つたものであるから、決して油斷をせず、國民が有つ凡べての物力を傾倒して此戰を戦ひ抜かなければならぬ。日本は既に此れまでに元寇と日露戰爭と、二度大國難に遭ふて能く

大敵を撃破 した。此度の米英を相手とする三度目の國難も亦之を完全に切

抜けなければならぬ。

幸にして我方には忠勇なる將士の頼むべきはあるが、銃後の者としても、有らゆる困苦缺乏に堪へ、又勤勉努力、且つ極度に生活を切詰めて、戰の爲めの資材を調達しなければならぬ。

此點については學生諸士も能く此事態を諒解して之に協力しなければならぬ。尙ほ其上にも學生諸士は軍の要請によりて其々の場所の警備につくべきことになつて居り、一旦、出動命令の下つたときは、現役の將士に準じて待遇されやうし、防衛戰士といふ意氣込にて眞剣に勤務し、職域奉公の實をあげられたいものである。

さて此戰爭にして我方に有利に進展するに於ては、我方としては支那事變の處理が自ら有利に運ぶ可能性もある。蔣政權の頼む米英が日本に對して力の足らざることが證明されるならば、何れは蔣政權の内部の崩壊も起るであらう。そして之と共に日本が既に我に歸屬して居る味方國たる滿洲、中華、泰、佛印の外に其他の若干の南方國をも協力せしめて、東亞共榮園を作ることが出来る。此國々の間に物資の交流を行ふたならば、其れで以て我國及此等の國々の經濟的發展が出来、之を土臺として高度國防國家の完成も出来るであらう。勿論此圈内にて産出する資源だけでは尙ほ不十分なるものがあつたとしても、其は他の並立する共榮園、即ち

歐洲大陸園

や、英米園などでも其々に其園内にては不十分なものであるであり、やがて此諸の園と園との間の交通も開かれるやうになるであらう。一環或園々の間に共榮園が成立つても、其れの内だけにのみ交通して他の園とは絶交するといふことはないであらう。そして各國の經濟の土臺が一應、其々の共榮園にて出来、其の國々が地理的に近接して居るときには、お互の物資の補給が、遠來の物資に依るよりは容易、且安全である。

日本を中心として東亞共榮園が幸にして其各國が近接して居るのみでなく、寒帯から温帯へ、更に熱帯にまで亘るといふのは、歐洲プロックのやうに寒帯と温帯とのみに亘るのよりは、一層種々なる物資を享受することが出来る便があるといふもので心強き限りである。私は此東亞共榮園の確立の時機の一日も早く來ることを冀ふものである。かくして我等の爲めに必要なる物資はお互に十分に獲得することが出来るのみでなく、此共榮園内にある民族は大部分が有色人種に屬するから、同族園となることも出来、そして長い間、白人から搾取されたる有色人種の解放といふことも行はれる。世界歴史の一變革となる。

此場合に於て我國としては白人國が從來此等の國々に對したやうな殖民地化態度を止めて、彼等自らの國の獨立自由を尊重し、唯、其指導的地位にて甘んずる

やうにしなければならぬ。又唯だ経済的の發展のみに力を用ひ、又は武力を充實するだけにて甘んぜず、文化、學問藝術に力を用ひ、其に於て他の國々をして我

を尊敬せしめるに足るものを有つやうに努めなければならぬ。實は學徒の任務が此點に於て最も重大であることを忘れてはならぬ。

世界史の一轉換

—人種と民族—

教授・圖書館長 岩崎卯一

日本帝國が獨り祖國の興廢のみならず大東亞の運命を暗して二大強國なる亞米利加合衆國と英吉利帝國とに自衛の戰を宣したることは、又盟邦たる獨逸國と伊太利國とが日本帝國と共同して米英に宣戰せることは、確に世界史上の偉觀であり且つ世界史上に一轉換を生ぜしむる事象である。此種の世界史的轉換の意義は固より政治・經濟・文化其他各種の視點よりそれぞれ規定され得るも、茲には、「人種と民族」の立場より努めて客觀的に考察して見たいと思ふ。

日本帝國が米英二大國に宣戰したるは宣戰の大詔にも昭かなる如く、まさしく日本帝國を中軸とする「大東亞の自衛」に外ならぬ。

◇宣戰◇

の大詔に「東亞ノ安定ヲ確保シテ世界ノ平和ニ寄與スルハ不顯ナル皇祖考不承ナル皇考ノ作述セル遺猷ニシテ朕カ拳々措カサル所」と仰せら

れ、而も米英兩國に對し開戰するは「洵ニ己ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナランヤ」と重ねて仰せられしことに依り一點の疑なきが如く、「大東亞の平和」、即ち現在の用語例に遵へば「東亞共榮圈」の確保こそ、「大東亞戰爭」の中心目標である。明治二十七八年の日清戰役も明治三十七八年の日露戰役も、今回と同じく「東洋平和」のために遂行されたのである。これ等の戰爭は、或は肇國以來敵に侵されたることなき日本領土を自衛するため、或は日本領土に直接せる朝鮮・滿洲の防衛のために遂行されたる觀あるも其の究極目的は廣く東洋平和の確立に存したのである。

然るに、今回の對米英戰に至つては、日本の實力を以て日本の企圖する大東亞共榮圈の確立を實踐する段階に達したのである。詳言せば、東亞共榮圈のなかに住める約七億の所謂「黃色人種」が、其指導者として起ちし一億の日本民族の鼓舞・激勵・援助に促され、久しきに亘り帝國主義的野望を逞しくせし所謂「白色人種」の巨頭米英に對し、健氣なる自己解放運動を開始したのである。それは正に一種の人種戰の相貌を呈してゐる。勿論、歐米人種學者は、東洋に住む人類を人種學的に細分し、努めて「黃色人種」なる稱呼を避けんとしてゐる。此種の分類に據れば、日本國民と中華民國人と同一人種ではない。日本人は朝鮮人・蒙古人・土著人等と共に「ウラルアルタイ系人」に屬するに反し、中華民國人は印度支那人・泰人・緬甸人と共に「昆崙系人」に屬し、マレー人は又別の人種を構成するものとせられてゐる。

然し、日本國民が遙か彼方地中海と黒海とに國を成し全く異りたる風俗を有する土耳其國民を親戚として、同文同種の語を以て二千年來交渉し來れる支那人を他人として眺むることは、實際上不可能である。東亞共榮圈内に國を成せる諸民族、即ち、一億の日本國民、三千萬の滿洲國人、四億四千萬の中華民國人、二千五百萬の佛印人、一千萬の泰人、六千萬の蘭印人、一千萬の比島國人は、「黃色人種」の名稱に總括されるに相應はしきほどに、人種的特徴を共にしてゐるのである。斯かる分類は、亞米利加合衆國が、日本國民の憤激を招きたる移民禁止法に於て率先之を提示せる所である。斯くの如き七億の黃色人種が、其故郷たる東亞の天地に安住し、自己の勞力に依り生産せる物資を自己に於て消費し得る境涯を現出せんとする所に、今回の聖戰の意義がある。この目的は、西歷十三世紀の初頭、蒙古族が拔都を元帥として五十萬の大兵を擁して歐洲に西征したるが如き侵略的なるものではない。單に東亞人の爲に

◇東亞◇

の平和を確保す可く祈念するに過ぎない。此の諒慮なる東亞人の願望が、英米の東洋制覇に對する實力的抗議を契機として發現し、既に、日本國・滿洲國・中華民國・佛印國・泰國を一丸とする東亞人種の共同防衛を成立せしめてゐる。中華民國の重慶政權は、現在こそ從來の行きがかりに囚はれて反省を躊躇せるも、東亞人の自己解放運動なる大勢に何時迄も抗し得るものではない。米國の支配下に在る比島共和國、英國の鐵鞭下に在る馬來及び緬甸人、和蘭の統治下に在る蘭印人が、日本帝國を盟主とする所謂「黃色人種」の大團結に参加する事も、最早全く時日の問題である。而して、東亞共榮圈の確立なる共通目的の漸次的達成に伴ひ、從來歐米の白色人種を舞臺の主役として記述せられたる世界史も亦、今後は舊き文化の基盤上は新銳なる文明を築き上げんと期する黃色人種七億の参加に依り、一段と内容を加へ精彩を放つであらう。東亞の諸國民は決して單なる「文化の模倣者」として西歐諸國民の文化糟粕を嘗むるに止まるものに非ずして、寧ろ所謂「白色人種」と

同じく「文化創造者」たる榮譽を分担する素質に恵まれてあるものである。此事は五千年に亘る支那の文化史、特に三千年を一貫する我が日本民族の國體史上に現はれたる諸業績のみならず、過去に於ける泰國・佛印國・閩印國の埋もれたる文化史蹟を顧るとき、最も明瞭に證明されるであらう。

然るに、獨逸國及び伊大利帝國が新に亞米利加合衆國に宣戰し、日本帝國と相結んで米英二大國を敵に廻して起ちたるは、日本帝國の場合と異り、人種的意義に非ずして特殊なる民族的理由に基くものである。獨伊人も英米人も等しく白色

人種であり、インドゲルマン人種の代表者である。ゲルマン民族と言ひ、ラテン民族と呼び、アングロサクソン民族と稱するも、其處には人種的偏見は固より民族的對立意識も殆ど存在しない。されど、獨伊二大國が白色人種の運命を暗しつゝ、亞米利加合衆國に戰を挑みたる目的の一は、全世界の金融資本と言論報道機關との中樞に喰入り、事實上米國の國策を左右せる猶大民族の勢力を打破して再び起上り得ざるに至らしむる事である。現在の世界に於ける猶大民族の人口は僅に一千五百三十萬にして、世界人口の千分の九に過ぎない。このうち九百四十萬人は歐洲各國に分散し、四百六十萬人は亞米利加大陸に住めるも、後者にありても四百二十萬人はルーズベルト治下の北米合衆國に住んでゐる。

特に世界第一の都會と認められる北米紐育市には二百五十萬の猶大人が住居し市の政治・經濟・文化の各機關を掌握し殆んど猶大民族の首都たるの實質を具してゐる。歐大陸に於ける猶大民族の蠅集地たりし舊波蘭土の猶大人口三百萬人に及ばざるも、ソヴェト露西亞の全領土に於ける猶大人口二百六十萬は、紐育市のみに於ける猶大人口を僅に凌駕するに過ぎない。此等の冷かなる數字を見るも、如何に北米合衆國が猶大民族の「天國」であり、且つ此國の金融中樞たる紐育市が猶大人の「樂土」たるやを悟るであらう。

然るに、此等の猶大民族は、歐洲に於ても又亞米利加に於ても、「祖國を有せざる貧乏の金貨業者」と罵られ、

◇社會◇

的には卑賤なるものと

して甚しき差別待遇を享けてゐる。特に彼等の最も多く居住せる波蘭と露西亞とは、屢々民族的偏見と憎惡とに基く猶太人大屠殺の悲惨なる記録を提供してゐる。現在、全世界の猶大民族の首腦と中樞とが北米紐育市に期せずして聚合したるは、北米合衆國が「民族の鑄鐵爐」と言はれる程に民族的自由を認容する新國家なるが故である。斯くの如く彼等はこれまで歐洲に於て「國家」と「基督教」との名に依る差別待遇と迫害とに脅かされて來たのである。従つて、此等の猶大民族が自己民族を迫害し來れる「國家」と「基督教」とに愛着の情を寄せ忠誠の念

を抱き其護持に積極的たり得ざりしは、何寧ろ當然であらう。然し、彼等は世界の國家にありても常に少數民族である。正面より迫害者に對抗せんか、其處に彼等待つ運命は、多くの場合に悲痛なる虐殺に外ならぬ。斯く少數民族の悲哀を嘗めつつある猶大民族にとりての自衛と復讐との手段は、巧妙なる宣傳と煽動とを以て敵の陣營を攪亂し、能ふ限り敵同志を相剋自滅せしむる事に依り、所謂「漁夫の利」を收むる方法である。此種の權謀術數こそ猶大民族の最も得意とする所であり、加ふるに彼等の掌握せる金融機關とは、其目的達成に重要な役割を演ずる。この爲に猶大民族は歐米人一般の關心を自己の頭髪を焦す危険ある民族問題より他の問題に轉ぜしむべく努むる。其一例とされつつあるは猶大人學者カール・マルクスの名と共に知られつつある階級闘争理論である。獨逸哲學者マックス・シェラーの如きは、ナチス政權の樹立以前に、マルクスの階級理論を以て、猶大民族が自己の民族的なる差別待遇に由る憤懣を慰する爲に、全世界の無産勞働階級の被壓迫感に伴ふ「僻み」を利用せるものなりと高唱してゐる。

斯くの如き猶大民族に正面より迫害の手を加へたるが、ヒットラーを指導者とするナチス獨逸であり、稍々微温的ながら之に倣へるがムツソリーニの率ひるファシズム伊大利である。ヒットラーは、第一次世界大戰に於て戰爭に勝てる

◇獨逸◇

帝國を内部より崩壊し

たる憎むべき陰謀者が、イデオロギー的には共產主義又は社會民主主義を唱へ、政治的には獨逸社會民主黨を操縦せし猶大民族系獨逸人なりと確信し、ナチス黨の重要政綱の一に「文化の破壊者」としての猶大民族排撃を掲げ、政權獲得後には此政綱を徹底的に實踐したのである。獨逸をはじめ其支配下に立つ歐大陸の各國より閉出しの厄に逢へる猶大人が、恨を呑みつつ追放の旅をつゞけ蠅集せるが、猶大人の天國である北米合衆國であり、就中紐育市である。既に紐育市の金融街の實權を掌握し米國の二大政黨と有力諸新聞とを自家壟斷中のものとする米國の猶大民族首腦は、ヒットラーに依り亡命し來れる同胞を迎へて、獨逸と其與國とに對する民族的復讐の決意を固め、得意の權謀術數を弄して、「英雄妄想狂」たらしめんとせる米國大統領ルーズベルトを利用し始めたのである。歐洲より追出されたる猶大民族は、亞米利加大陸を殘されたる唯一の安住地と定め、此處を自己民族の爲に確保すべく、一億三千萬の米國民を煽動しつゝ、獨逸に復讐戰を敢行してゐるのである。されど、猶大民族の慣用する斯くの如き「利用戰爭」も、近き將來に其正當なる報酬を彼等の頭上にもたらすであらう。ルーズベルト大統領の晩年もウイルソン大統領の悲惨なりし晩年の如く、世界歴史の上に一個の寂しき墓標を殘すに過ぎないであらう。

大東亞戰爭の意義と覺悟

講師・經博 石川 興 一

近世は個人を主體となし個人が自己の利益を追求する「社會」Schwarzを以て人間の本質的な有方となしこれを實現せんとする「社會」の論理を以て形成された。この「社會」は持てるものが主體となつて他を搾取するところの資本主義體制として世界的に發展した。この世界資本主義體制に於て搾取的地位に立てるものは小數の白人諸國であつて人類の大多數を成す有色人種諸民族は被搾取的地位に置かれたのである。その本國に於ては極めて備な資源を有するのみであるこれ等白人諸國は、それ故に物に深き關心を有して物を支配する科學並に技術を發展一せその力によつて東亞にまで侵略し來り、物に恵まれそれ故に物に無關心であつた有色諸民族をその支配の下に置いたのである。かくて世界史は白人を主體とする歴史となり、一切はこの白人の立場より考へられることとなつた。これが近世の世界史である。

大規模に於て第一次世界大戦として勃發した。

第一次世界大戦は、世界資本主義的秩序に於ける支配者たる英國に對する新興獨逸の爭鬪戦であつた。この戰爭は一九一七年ロシアに於て社會主義革命が勃發し次いで一九一八年獨逸に於て同じく社會主義革命が勃發し以て終りを告げた。世界資本主義的秩序を前提とし資本主義的爭鬪戦を以てはじまつたところのものが、資本主義秩序を否定せんとする社會主義的實現によつて終りを告げたことによつて既に世界資本主義的秩序の動搖がはじまつたのである。この社會主義はロシアに於て發展し社會主義ロシアが世界史的舞臺に現れ來つた。

然し社會主義は獨逸に於てはやがて全體主義に轉換しこの全體主義獨逸が世界史的舞臺に現れ來つた。この大戦に於て勝利を得たる英國は、依然世界資本主義的秩序を保持し、この大戦を通じて資本主義的勃興を遂げた米國と共に資本主義的支配の地位を確保するに努めて來たのであるが、第二次世界大戦は、この資本主義英國と全體主義獨逸と社會主義ロシアとの間に勃發したのである。故にそれ

は第一次世界大戦が資本主義戰爭であつたとはいふにその根底に於て世界觀の爭である。こゝにこの大戦の獨特な性格が存する。而もこの争は白人同志の世界爭霸戰たる點に於ては異ならない。即ち英米が自分達を支配者とする世界資本主義體制を保持強化する爲めに戦ふに對し、獨逸は獨逸民族

の爲めに戦ふのであり、ロシアは自己が支配的地位に立てる第三インターナショナルを世界に擴充するが爲めに戦ふのである。その各々が自己を主として他を支配せんとするこの戦は惡無限の戦であつて人類を自滅に至らしむべきものであると共にまたその何れが勝つとするも白人支配の世界史たるに異なるところはないのである。

この白人優越の世界觀を打破し眞に人類の世界史を將來することは白人諸國に於ては期待し得ない。而も有色民族はこの白人の支配の下に置かれて居るのである。この世界史の中にあつてこの世界史を轉換せしめ得べき唯一の國民は日本のみである。

白人の東洋侵略波は東亞の諸國民の獨立を否定して進んだのであるが遂に極東の孤島日本に至つて押し返へされた。こゝに世界史の轉換點が保存せられたのである。この日本は先づ自己の存立を保持する爲めに大國支那と戦ふてこれを破つた。然しこのことは眠れる獅子の弱點を

世界に露呈する結果となり、三國干渉をはじめ白人の支那侵入を促進することとなつた。

其後の日本はこの白人の東亞侵略の基地を一步一步放棄せしめて進んだのである。先づ日露戰爭に於てはロシアをして旅順に於けるその基地を放棄せしめ、滿洲よりも撤兵せしめた。第一次世界大戦に當つては獨逸をして膠州灣並に南洋群島を放棄せしめ東亞に於ける基地を全く失はしめた。今や第二次世界大戦に當つては佛蘭西が破れてその東亞の基地が急激に無力化し皇軍が佛印にまで進駐するに至つた。かくして本國を遠く距つた白人諸國の東亞に於ける有力な基地は香港・シンガポールに於ける英國の基地、マニラに於ける米國の基地のみとなつた。

有色人種

を搾取的地位に置きかくて

成立てる世界資本主義體制に於ては、この搾取に關して搾取者相互の間にもまた武力的闘争が行はれるのである。それは

世界制覇

の爲めに戦ふのであり、ロシアは自己が支配的地位に立てる第三インターナショナルを世界に擴充するが爲めに戦ふのである。その各々が自己を主として他を支配せんとするこの戦は惡無限の戦であつて人類を自滅に至らしむべきものであると共にまたその何れが勝つとするも白人支配の世界史たるに異なるところはないのである。

この白人優越の世界觀を打破し眞に人類の世界史を將來することは白人諸國に於ては期待し得ない。而も有色民族はこの白人の支配の下に置かれて居るのである。この世界史の中にあつてこの世界史を轉換せしめ得べき唯一の國民は日本のみである。

白人の東洋侵略波は東亞の諸國民の獨立を否定して進んだのであるが遂に極東の孤島日本に至つて押し返へされた。こゝに世界史の轉換點が保存せられたのである。この日本は先づ自己の存立を保持する爲めに大國支那と戦ふてこれを破つた。然しこのことは眠れる獅子の弱點を

建設

ある。皇軍の海陸に於ける

勇奮は英米勢力の破壊戦を著しく進捗せしめた。滿洲事變、支那事變より今日に

至るまでのこの皇軍の貴い犠牲を生かすか殺すかは一にこの建設戦にかゝつて居る。この爲めには今後長期に亘つて國家の總力が發揮されなければならないのである。對米英宣戰の詔に於ては「億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケ」と仰せられて居るのであるが、然らば如何にしてよく國家の總力を擧げ得るであらうか。こゝに我々は深く思を致さなければならぬ。

今日世界史の舞臺に於て力強く行動しつゝある諸の國家は各々その國家の總力を擧げて戦ふてゐるのである。而もそれ等の國家が總力を擧げる仕方は國々によつて一様でない。英國は資本主義體制を以て獨逸は全體主義體制を以てロシアは社會主義體制を以て國家の總力を發揮して居る。これ等の體制はそれぞれの國の自然・民族・歴史に基いてその總力を最大に發揮せしめ得るところのものである。然らば日本をして最大の總力を發揮せしめ得る體制は何であるか。それは日本の國體を離れてあり得ないのである。紀元二千六百年に賜はつた詔に於ては、「今や世局ノ激變ハ實ニ國運隆替ノ由リテ以テ判カルル所ナリ」と仰せられたが、

この國運

を興隆ならしむべき道を「和衷戮力益々國體ノ精華ヲ發揮シ」と宣せられ更にこの國體の精華を「歷朝相承ケ上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ボシ下忠厚ノ俗ヲ以テ上ニ奉シ君民一體」と仰せら

れた。この國體の精華を益々發揮することのみが國運を興隆せしむる道である。

對米英戰の門出を飾り日本の國際關係を飛躍的に好轉せしめ建設戰の將來に重大意義を齎らした我海軍の働きも、ワシントン條約以來二十年間生命を以て上に奉じ死に惜しまざる國體精神により奇麗武器を發展せしめ真摯な訓練を積んだ成果である。この決死の覺悟を以てしてこそ「各々其本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケ」ることが出来るのである。

これが即ち下忠厚の俗を以て上に奉ずる所以である。このことが長期に亘つて爲されることによつてのみはじめて東亞新建設が完遂するのであるが、この爲めには「上仁愛ノ化ヲ以テ下ニ及ボシ」との大御心を益々實現しなければならぬ。この爲めには先づ國民生活に絶對的に必要な程度に於ける衣食住について不安あらしめてはならない。更に醫療についても同様である。更に教育が國民各自の能力次第に興へられなければならない。日本に生れたものは一人一人が「億兆の父母」たる陛下の「赤子」である。維新の詔の「天下億兆一人も其處を得ざる時は皆朕が罪なれば」との大御心はかくしてはじめて實現し、かくして一人一人がその持つて生れた能力を最大に啓發し得て眞に其處を得しめられ自己の總力を擧げ國家に盡しかくして國家の總力が長期に亘つて發揮され得るのである。これ

が若民一體の我國體の精華の發揚である。國民としての職分を盡す爲めに絶對に必要な衣食住、醫療、教育までが商品化され國民の大多數にこれが不足した資本主義體制に於ては全國民の長期總力の最大なる發揮を期待することは出来ない。我國體に即する長期總力體制の日本にしてはじめてその國體精神を以て東亞に對することを待、こゝにはじめて東亞が「いへ」となるのである。即ち「萬邦ヲシテ各々其ノ所ヲ得シメ兆民ヲシテ悉ク其ノ塔ニ安ンゼシムル」大精神が先づ

大東亞戰爭と我等の覺悟

教授 中 谷 敬 壽

東亞の諸民族に實現し、東亞諸民族が各々處を得て、その各々の能力を以て東亞の「いへ」の爲めに盡すのである。この東亞の「いへ」の精神が更に世界に擴充されて世界が「いへ」となるのである。かくして日本の自然・民族・歴史の貫徹する「大家」の論理が一切を貫徹する日本本行動の論理となつて「人類ノ福祉ト萬邦ノ協和トニ寄與スルアラソコトヲ期セヨ」との大御心が具現し行くのである。(昭和十六年十二月十五日)

皇紀二千六百一十一年十二月八日！それは後世おそらく「新東亞の夜明け」をなすものとして世界史に特筆大書され、大東亞の存する限り永く々々牢記して忘れられないであらう。蓋しこの日、畏くも對米英宣戰の大詔が渙發せられ、支那事變をも含む對米英戰争を意味する所謂大東亞戰争なる聖戰の本義が、高らかに中外に宣明せられたからである。こゝに一億國民の奮ふところは儼として定り、眞に恐懼感激に堪えない次第である。しかし全國民が先づ衷心より深甚なる感謝の意を表すと共に、又將來に對し無限の信頼を拂ふことを禁じ得ないものは、お

そらく長期戦を免れざる今大東亞戰争の開戦以來の旬日、既に業に國威を高く高く中外に顯揚した、わが皇軍の贏ちえたる絶大な戦果とわが外交の收めえた大なる收穫との二つであつて、かゝる戦果、收穫はもとより御凌威のしからしむるところではあるが、しかも殉忠報國の皇軍將士の武勳と百僚有司の奉公とに依らないものはなく、更にわが外交と武力とがこの度はほど有機的に緊密に相調和しその機能を十全に發揮しえたことは、蓋し鮮かなるべく政戦兩略一致の尤たるものであるといふことが出来る。

しかして戦時下われ々國民は如何なる決意乃至覺悟を有つてゐなければ

ならぬか。それは勿論、一億國民は襟を正して承認必謹、感奮興起して眞に各々その本分を竭し、億兆心を一にして殉國の赤誠を傾け、國家の總力を戰爭目的に集中して聖戰目的の貫徹に邁進し、依て以て唯々 宸襟を安んじ奉ると共に、光輝ある皇國二千六百餘年の歴史に辱ずることなきを期せなければならぬ。しかもかくのごとく御稜威の下軍官民が眞に一體となり、精戦の大捷に有終の成果あらしむべき征戰不還轉の一億國民の決意は、「軍國の急務」に關し召集された今次第七十八回臨時帝國議會を通じて、現に明かに表明せられたところである。學生生徒といへども各自皆國民の一員である以上その時局に對する決意乃至覺悟においては、右帝國議會において公にされた一億國民の不還轉の決意と間然するところあるべきでない。従て學生生徒も亦國民たる一般的地位においては、右に表明された一億國民の決意を以て自らの覺悟となすべきは勿論である。

二

だがわれわれがその不還轉の決意乃至覺悟を堅持し更に一段と之を強化するためには、何はさておき大東亞戰爭の本義に對する認識を常に深化し、之との基礎理念たる世界正義との關係、又之とその終極目的たるわが建國の理想との關係を明かに把握して、大東亞戰爭の世界史的使命を體認することこそ最も肝要な事柄であると思はれる。

歴史は絶対的なるものが相對的なるものにおいて現成す過程であるとも云はれるが、そのいはゆる絶対的なるものとは理念としては道義又は正義若しくは原理の普遍的秩序であると解しておそらく大過ないであらう。従て相對的絕對的存在たる國家の道義性とは、國家が他國と共存共榮して人類世界の秩序に自らを自律せしむるといふ諸國家共存共榮の普遍的秩序に外ならず、之を無視してはその國家は道義又は正義若しくは原理に背いて、內的にも外的にも永く自存することを得るものではない。従つて國際正義の美名に隠れて強大な國家が自己の利益を永く獨占せんがために、現状維持を主張するのは明かに利己主義であり、疑もなく道義の反對物であり背理であり又正義の敵である。然ればかかる反道義的世界秩序はやがては正義に基く戰爭に依つて轉換せられるが、それは正しく人類歴史の必然の要諦であり又天の摂理でもある。この意味において戰爭はそれ故に、常に人類の解放のための戰爭であると云ふことが出来る。

かくて既に一の世界大戦の規模にまで發展して來た今日の兩洋における世界的大戰争は、要するに米英の利己的霸道的世界支配の桎梏を打破して、道義又は正義若しくは原理を理念とする人類世界の新秩序を建設せんがための戦であり、大東亞戰爭も亦實に米英の霸道的搾取的支配より東亞十億の民族を解放し、大東亞共榮圏の確立に依つて東

亞本然の性格を發揮せしめ、そしてそれが引いては世界二十一億の全人類の上にも亦眞の平和と幸福とを齎すべき新秩序を建設せんがための戦である。先に弄した宣戰の大詔に「東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與ス」と仰せ出でさせられたのは、正しく大東亞戰爭の本義を明瞭ならしめ給ふたものと拜察したてまつる次第である。

三

而して帝國の國是たる支那事變の解決は、今や大東亞戰爭等に包含せられることに依り大東亞新秩序建設の一環として、更に世界新秩序の建設に貢獻せんとする様相を呈するに至り、それは正に舊世界秩序轉換といふ必然的な世界史的使命を明かに帶有するに至つたものと云ふことが出来る。搗て加へて八紘一字といふわが國盛國の一大理想こそは結局覇道を克服して皇道を光破せしめ以て萬邦をして各々その所を得せしむるといふ、人類世界の道義的普遍的秩序の建設を意味するに外ならないから、大東亞戰爭は正しく世界正義を理念とする正義の戦であり原理の戦であり、又方にわが國盛國の一大理想を顯現せんとする聖戰であるといふことが出来る。

かくのごとく大東亞戰爭は東亞新秩序を建設せんとする回天的世界的大事業であるのみならず、又他方強大を自負せる米英兩國の舊秩序に對する執着抵抗も亦決して侮りがたいものがあるであらうから、戰爭は勢ひ長期戦となるを免れざるべく、その最後の勝利を贏ち得るまでに

は、時に前述幾多の難關の立塞り又荆棘の横たはることもあるであらうが、われわれはこの戰爭の世界史的使命を體認し正義と必勝の信念に燃えつゝ、獨一伊並に滿・華・佛印・泰の盟邦諸國と相提携し、前記一億國民の不還轉の決意乃至覺悟を更に強化し、一死報國以て大東亞戰爭の目的完遂に邁進せなければならぬ。

戰時下において學生生徒が如何なる決意を有し又如何なる覺悟を有つておなればならぬか、更に又それを如何にして強化すべきかについては、既に右に述べた通りであつて、學生生徒といへども各自皆國民である以上、戰時下における學生生徒の決意乃至覺悟は一般國民としての決意乃至覺悟と敢へて間然すべきでない。即ち戰時下における一億國民の決意乃至覺悟が戰爭目的に結集せられて普遍的共通的であるといふのは、それは全く總て一般國民たる地位そのものにおいての問題であるからである。之に反し戰時下われわれ國民は何を爲すべきかといへば、それは各々死力をいたして眞にその本分を竭すべきである、といふ形式においては大張り普遍的共通的ではあるがしかも人は各々その職分を異にしてゐるから、何を爲すべきかの内容においては實に千差萬別たらざるを得ない。蓋し一般國民たる地位においての問題ではなくして、各人それの職分乃至身分に於いての問題であるからである。

然れば總力戰たる近代戰の戰時下においては、國民は一億一心、そのあら



學内報

入學試験日程

在學年限短縮に伴ひ従来三月下旬から四月月上旬に行はれた本學各科目入學試験は次の如く行はれることとなつた。

出願締切 試験

學部	三月六日	三月七日
豫科	三月七日	三月九日
專門部第一部	三月十日	三月十一日
專門部第二部	三月十日	三月十一日

戰爭完遂祈願

十二月八日畏くも對米英宣戰の大詔發布せられたるや、本學に於ては正午を期し千里山、天六兩學舎に夫々米英斷乎膺懲、戰爭完遂祈願式が行はれ、續いて學部では神戸學長、豫科では村上豫科長、專門部では正井專門部長の決戰體制下に於ける學生の覺悟に就いて訓示があつた。

學則臨時措置委員會

學部では今回在學年限の臨時短縮に伴ひ従来の學則を變更してこれに即應せしめやうとする臨時措置につき昭和十七年度學則臨時措置委員會を設置し、短縮による學力低下防止と學徒の國家的使命發揚のための教育充實を協議する。なほ同

委員會の關係委員は左の教授諸氏である

法文學部—堀正人部長、木村健助、岩崎一、武内省三各教授
經商學部—水谷揆一部長、磯部喜一、瀧澤喜子雄、吉田一校各教授

海軍軍事講話

十月十七日午前九時より例年學部に於て行はれてゐる海軍軍事講話が新卒業生たる三年生に課せられた、講師は海軍人專部瀧本大佐で講話終了後自由質問を行ひ、海洋への認識に資するところ大であつた。

專門部査閲

本年度專門部學校教練査閲は十二月十八日午前八時半より新淀川公園演習場及天六學舎に於て大教師團司令部附三浦忠次郎少將視閲の下に行はれたが、先月來の學部豫科査閲同様決戦下實戰即應の上から相當嚴格に行はれたが本年の成績は特に良好と認められた。

徴兵検査

十二月卒業の學生及び新制度による徵集延期事故止みの學生に對して行はれる臨時徴兵検査は本學千里山、天六兩學舎

ゆる生活が戰爭目的に集中せられ、そのあらゆる力が戰爭目的に結集せられて、舉國一致の體制を以て戰爭目的の達成に邁進してゐると云つても、國家が命じて特殊の任務に就かしのめのでなければ、國民は各々その木分に精進し眞に之を竭すことにおいて、舉國一致の體制に參與してゐるのである。是れ戰時にあつてもなほ平時におけると同様、眞に各々その本分を竭すといふ意味において、いはゆる職域奉公が益々大切な所以である。それ故に戰時下においても國家が直接特殊の任務に就くべきことを命じない限り、學生生徒はたとへ國民感情としては戰爭目的の達成に焰のごとく燃え上りつゝあると云ふこと、須く平靜なる研究心を失ふことなく、尙ほ依然として學生生徒本來の職分たる學業に精進傾倒することこそ、能くその本分を竭すものと云ふべく、從て國家の命ずるところに從ひその特殊の任務に就くと、未だそのことなくして本來の學業に精進するとの間において、その態度を異にするべき謂はれない。然るに戰時下にお

いては世上稍々ともすれば、未だ國家が特殊の任務に就くべきことを命ぜざる場合、その者本來の職分に精進努力することを以て輕視するが如き風潮がないでない。若し之れありとすれば、それは、戰時下國民が國民として如何なる決意乃至覺悟を有すべきかの問題と、戰時下國民は何を爲すべきかの問題とを、混同したものと云ふことが出来るであらう。

之を要するに、大東亞戰爭の闘はれてゐる今日においては、學生生徒といへども須く既に戰爭目的のために結集せられたる一億國民の不退轉の決意乃至覺悟を以て自らの決意乃至覺悟となし、しかもその未だ國家の命ずるところなければ尙ほ平靜の心を以てその惠まれた本分たる學業に精進傾倒すべく、その一度國家の命ずるところあれば勇躍その國家的特殊任務に就くべく、そのいづれの場合たるを問はず一死君恩に報じ大東亞戰爭の目的完遂に邁進し以て世界平和の確立に寄與するの用意がなければならぬであらう。(昭和一六、一一、一七)

を臨時徴兵署として左の如く行はれた。

- ▽千里山學舎 十二月一日—五日
- ▽天六學舎 十二月十三日—廿日

かくほう抄

▽吉田二枝教授研究發表——去る十一月廿、廿一、廿二日の三日間文部省主催の日本諸學振興委員會法學會に「帝國憲法の根本精神」に就いて研究發表と

れた。

▽安藤、福島兩教授法學會出席——吉田教授と共に日本諸學振興委員會法學會に出席された。

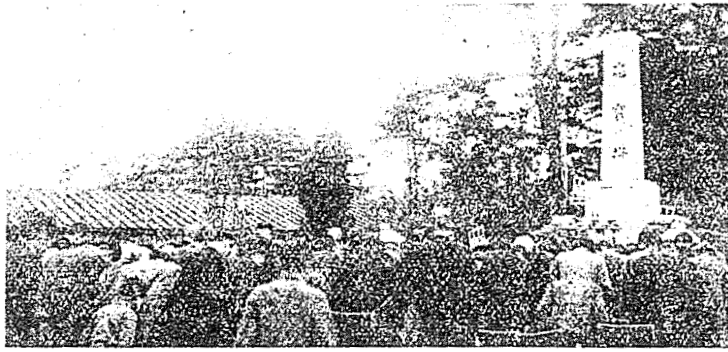
高文司法科合格者追加

中野 留吉(四六) 藤本 清勝(四七)
藤森勝太郎(四八)

校友

新體制校友總會
千里山學園に舉行

昭和十六年度校友總會は十一月二十三日午後一時より母校千里山學園に開催、十三年革新校友會を目指してより中之島中央公會堂に於て常に盛大を極め有意義に催された校友會も本年は時局的意義を反映して眞摯な校友總會を企圖、茲に開



士博川末の中演講と拜參塔鐘忠は眞寫

催されたものである。

午後一時校友の參集を得て先づ母校忠靈塔の前に陣設校友各位に敬虔な感謝の禱りをさへげて後、豫科學會講堂に入り總會に移る。

國民儀禮のち會長神戸正雄博士の挨拶に次いで松本幹事の事業報告並に昭和十五年度會計報告の後を受けて議事に入り、會則一部改正(八、十一、十三各條)の件を附議

- 一、常議員三十名を五十名
- 二、評議員百名を百名
- 三、常任幹事五名を十名

に増員を満場一致で可決、その人選を會長に一任するとともに職事を終つて萬歳三唱總會を閉ぢたが、當日出席の校友各位は躍進する母校の姿を眼前に眺め、或は秀麗の自然に圍繞された學園の風物を賞でつゝ三々伍々逍遙し或は家族同伴に半日を楽しく過すのが見受けられ、革新



校友會の新體制總會としてその意義大なるを闡明した。

引續き母校講師法學博士末川博氏の講演會に移り「臨戰體制と國家總動員法」に愈々決戦の固き決意を誇示すると共に國家總動員法の何たるかを銘するところあり盛會裡に午後三時半散會し

事業報告

並に會計報告

本年度の事業並に會計報告を申し上げます。本年度は昨年度に引續き本會事業は一層進歩の跡が認められ、愈々着實に軌道を辿り本會の躍進の様態を如實に示してあるものとして誠に御同慶の至りに存じます。これよりその大略を申し述べたいと存じます。

先づ第一は校友會支部の新設結成であります。全国各地に奮闘を續けておられる校友の御盡力によりまして、昨年十二月十四日結成を見ました廣島縣の備後支部を初めとし、只今までの處七支部で昨年度に於けるこれと同数であります。次にその設立月日と支部名を申し上げますと

- 備後支部(一五・一一・一四)
- 芦屋支部(一六・二・一一)
- 堺支部(同・二・二二)
- 廣島支部(同・四・二二)
- 香川支部(同・四・二七)
- 姫路支部(同・七・一三)
- 奈良支部(同・一〇・二六)

でありまして尙續々結成を見るの氣運あり本會發展のバロ

報國團彙報

專門部第二部

報國隊結成式

十一月十二日午後三時より天六學會に於て專門部第二部報國隊結成式を舉行、約五十名の隊員を以て一個中隊を編成し專門部第一部と行動を共にする事となつた。

專一・自肅三項

學園内の規律嚴正を期し併せて決戦下學徒の堅忍持久の精神高揚をはかる目的で第一報國隊は左の三項目につき自肅を促がし以て決戦への心構を明確ならしめてゐる。

- 一、長髮禁止——最近これが完全なる成果を擧げてゐる
- 二、襟巻——寒氣に耐へ得る肉體と堅忍の精神的訓練のために一層自肅が要望される
- 三、喫煙——喫煙室での喫煙に就いて未だ遺憾なしとしない。

燈管に二部生活躍

對米英宣戰に鐵石の防護障をはる本學就中二部では目下の問題として燈火の準備管制、警戒管制に留意しその萬全を期してゐる、その具體策としては

- 一、教室内の萬事及び待避は學級幹事の手で行ひ

メーターとして慶賀に堪えせん。又その他の各支部にあつても活躍頻繁で、中には地域的に聯繫を密にし事業を圓滑に行はんとする向もあります。例へば石川福井、富山の三支部の如き北陸三縣支部聯盟を結成し協調してその事業を行はんとしつゝあります。

次に昨年十一月より本會の紀元二千六百年記念事業として行はれてをります講演會は本年種々の事情により二、六、九、十月の四回のみ開催されましたが、毎月非常な盛會で校友各位からその意義が迎へられ遠く戦線の校友からも絶讃の言葉が送られて参つた程です。同講演會の各會にわたり講師と演題を述べますと

▽二月例会「大毎編輯總務布施勝治氏の「歐洲の變亂とソ聯」▽六月例会「京都帝大教授、母校講師谷口吉彦經濟學博士の「低物價政策と生産力擴充策」

▽九月例会「阪大工學部教授淺田常三郎博士の「新兵器に就いて」▽十月「大阪商船の技術部長で工學博士の和辻春樹氏による「造船と科學」

でありまして各位の御期待に沿ふため本部の担当者に於て今後の方策が綿密に考へられて居りますが、尙一層皆様の御協力によつて教養と相互親睦の意義を深めて行きたいと念願致して居ります。

第三に擧げられるものは、最近の目覺しい各地支部の活躍につれて支部主催による時局講演會に講師派遣方を請せられましたので本年は四月尾道市へ、九月金

澤市(御老體の神戸學長初め二教授を講師として御出張を煩はしました兩會とも各地で非常な盛會を極めると共に母校關西大學の名聲を昂揚するに力があつたものと確信致して居ります。

が出來ません。従つて當年度會費御拂込濟の方にのみ配布致して居ります故この點御了解願ひます。

第四には着々進められて行く本會事業就中これに伴ふ本部支部の連絡方法につき十一月一日本部と近接する各府縣支部との間に懇談會を開催しましたところ大阪、堺、岸和田、京都、西宮、川邊、芦屋、奈良、和歌山の九支部代表十四名の方々の出席を得「現下に於ける校友會事業」「本部支部の緊密なる連絡方法」等につき熱心な討議が續けられたことは本會並に母校に對する各位の御熱意を表はすものと感謝に堪えない次第です。

引續き昭和十五年年度の會計報告を申し上げます。然し會則上年度末は本年三月末日となつて居りますので、取扱ひの都合上、前年通り昭和十五年末現在の收支計算につき申し上げます。豫め御諒承願ひます。

第五は本年三月發行致しました校友會員名簿は昨年度分よりも一四四頁増加、總頁數四三〇頁の尨大なものとなりましたが、之は新に改姓名表、卒業年度別索引を添へました外、新會員一千餘名の増加によるものでありまして昭和十七年用名簿は目下原稿作成中でありまして本年は應召などによる移動殊に多く名簿の正確を期するため準備に相當手間取りましたので遅延致して居りますが昭和十七年三月末頃までには發行の見込であります

収入は一般收入として會費一三、八七五圓、利子五八圓七七錢、寄附金一圓、第三回總會々費收入五〇五圓五〇錢、前年度繰越金一、九六九圓六〇錢で合計一六、四〇九圓八七錢になります

尚名簿には相當の費用を要しますので遺憾乍ら全會員に御送附申し上げること

支出は雇員諸給費一、四三三圓三二錢、名簿費二、二二二圓七五錢、學報及び會誌費二、九九一圓四七錢、總會費一、〇七七圓三二錢、月例講演會費八三圓三〇錢で

其他備品費、消耗品費、通信費、雜費など二、五八三圓六七錢で合計一〇、三九一圓八二錢となり差引六、〇一八圓〇五錢が本年度へ繰越されることになつておま

が本年度へ繰越されることになつておま

二、別に本部(學生課)では報國團總務部幹事及び第二報國隊員がつめかけて學舍全般の完壁をはかると共に連絡、警戒及び應急措置の任に當る

學徒健康診斷

學・專厚生部主唱

體體練成には先づ自己の肉體を知るべしと去る十一月二十九日學部厚生部では東區唐物町の影久雀原相談所に學部學生の健康診斷を依頼、参加者多數を得て結構豫防、早期發見の検査を行つたが受檢者の九〇%以上が健康體を保證され學徒の體軀に頼もしい記録をのこした。

又専門部一部二部厚生部でも同様學生の身體に注意をほらひ颯橋回生病院と特約で連續的に健康診斷、疾病治療にのり出す事となり特約診察券を發行、學生の利用を促してゐる。

專一・修練部の新方向

専門部一部修練部では去る十一月十二日の部會で修練の目的意義を再認識しその具體策として「課外に於ける運動競技」に就き協議の結果、放課後同部幹事一同が野外で液刺と體育に力を盡し幹事の修練に資すると共に一般學生の参加を得て以て學園に明朗化、學徒の肉體的練成をはからうとする事に決し近く實現の可能性が約束された。

尚本年度に於きまはしは集金郵便制度が廢止されました爲に會費徵集に支障を來たしましたので本年六月封書により會費拂込方通知を致しましたところ現在まで振替による拂込は一、九〇〇名により新卒業生拂込者六〇〇名と合はせますと約二五〇〇名になります、昨年の四千六百名に比し約三分の二になります。今後共各位の協力によつて本會事業の源泉たる會費徵集に萬全を期したいと存じます以上によりまして何卒御承認を願ひます

千里山學士會總會

學部出身者を以て組織する千里山學士會では昭和十六年度總會を去る十二月六日午後五時より日本橋北詰のブラジル館で開催、會員百餘名出席し盛大であつた先づ國民儀禮を行つた後會長神戸正雄博士の挨拶に續き各理事の會務報告、會計報告あり次いで會則變更、理事改選を協議、新に副會長として母校教授水谷操一先生を滿場一致で推薦して總會を終了

晚餐會に移りこれに續いて寺岡海軍少將の緊迫せる國際狀勢並に海戰に關する講演を講聽、和氣霽々たる中に午後九時散會した。

新顔も多數出席

東京支部秋期懇親會
樹々の紅葉も今を盛りの十一月十九日帝都の中心日比谷公園松本樓に於て東京支部秋期懇親會を開催、午後五時參集の

とところ松澤支部長を初め新顔の校友も多數出席

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 中村峰藏 | 余九 | 安井竹松 |
| 牧野充安 | 宗内 正 | 山本仲次郎 |
| 藤田和夫 | 古田哲五郎 | 福田繁芳 |
| 清原五六郎 | 山口眞三郎 | 支次郎太郎 |
| 松澤卓規 | 河崎茂雄 | 板橋菊松 |
| 田中茂 | 長本元男 | 大前一成 |
| 加邊力 | 三森武雄 | 住谷卓雄 |
| 大月英平二 | 諏訪三郎 | 野口實之助 |
| 飯田隆也 | 森 啓 | 高田秀見 |
| 飯河隆一 | 高部和男 | 平井正義 |
| 米田忠八 | | |

の三十一名參加、賑やかに彼處に此處に母校の懐出談、對米問題など談論風發、誠になこやかであつた六時開宴に續いて支部長の挨拶、各自の自己紹介、支部に對する希望などが述べられたが、丁度臨時議會のため御出京中の内藤母校理事がお出で下さつて母校の近況、入學者の優秀、母校財政の強固に就き詳細に報告下さり、古顔の校友など母校の隆盛の様に今昔に堪えない感慨にうたれ今後の發展を祝福したものであつた。

板橋菊松氏よりは最近の問題に就き明快有益なお話を承り一同時間の經過するも忘れ熱心に講聽、散會したのは九時であつた。

支部の意義強調

奉天支部例會

當支部の例會が校友諸兒の熱意と愛校心により本月迄に既に四回開催され、その都度有意義に愉快に始終し而も校友の有難味を痛感させられて來たが、十一月

は極く簡単に夕飯後の軽いお茶とお菓子の程度で十一月午後七時半より明治俱樂部下グリルで開催

中村(儀)、鈴木克、齋藤善、中村(彌)、上岡、五島、西本、村上、多久、寺町、出井、堀澤、直吉、松山、飯田の熱心な校友は早くより集合、會の前途、職域の經驗談を語り、とりわけ會員の慶弔、各地支部との連絡、教授招聘による各地講演會などについて協議、意見の開陳を行つたが、この勢、この力、この存在を唯單なる私的交友の機關としてばかりでなく國家社會に貢獻奉仕しようとする團體、強固な結束により社會的に指導し先達となり得る如き團體に仕上げようとする意氣込も見られ誠に頼もしい集ひであつた。

尙十二月例會は忘年會を兼ねて十二月十一日午後六時半から奉ビル七階で開催される事に決した。

現地校友會の特質

上海支部秋季總會

本年度春季總會の決議により母校創立記念日たる十一月四日をトして文路の日本俱樂部二號室に上海支部秋季總會を開催したが、この日當地最快適の氣候所謂「上海の秋」の一夕、上海時間午後七時より菊蕪の中庭を眼下に支那料理と老酒に舌鼓を打ちつゝ過ぎし日の懷舊談に興じ或は同窓の消息を耳しては遠く思ひを友の上に馳せ或は會員の奮闘談、時局への

豫科擴張裝置成る

かねてより懸案中の豫科全教室及び周圍部の擴張裝置設置案は漸く本月六日完成したが、たま／＼勃發した大東亞戰爭にはこれを通じて刻々ニュースを送る外訓示、學生呼集などに資するところ多大で、又餐食時のレコード演奏なども考へられてゐる。

みかへりの塔 人形淨瑠璃を見學

學部社會見學部では十一月に入つてから各處に見學を續け學生にその意義あるところを知らしめて來た。

即ち四日堺刑務所見學に約四十名の出席者を得、十日みかへりの塔、十四日中山製鋼所に眞摯な見學を行ひ、十九日には人形淨瑠璃を文學座に見學するなど多彩であつた。

文學座にては桐竹紋十郎氏より人形淨瑠璃の歴史及び人形操作の具體的説明に、三時からの寶舞臺に日本固有の藝術「文樂」を心ゆくまで鑑賞した。

豫科耕地を借入

體力増進と集團勤勞、食糧増産の念を植付けるため、この豫科では耕作地を借入、十一月十日より千里山學園敷地内と馬場横の合計四段の耕作地にクラス別により耕作をふりあて、大麥、小麥、其他の蔬菜を植付けたがこれによつて從來勤勞作業の場所撰定の苦慮が除かれ、その成果が期待されてゐる。

各自の卓見に啓發されつゝ現地人の高揚する意氣を示して極めて盛大に現地校友會の特質を遺憾なく發揮した。

先づ忽那文治郎支部長開會挨拶、母校近況の報告に次いで辻野丈治幹事長の支部會員の動靜、月例會の件、支部會費の件などにつき事業報告あり、續いて協議事項にうつり

一、支部月報の發刊(梶川氏提案)
二、明年一月例會を新年懇親會とし、日本的な趣好による事

などを満場一致で可決したが、同日の出席者は會員總數五十四名中十九名で其他は多數が内地出張、視察など事業上の止むを得ざる事情により欠席されたが、大いに動き大いに活躍される事も亦現地上海の性格上致し方がないと見られるが、出席者中には多忙の寸暇をさいて來會せられ時間上總會に出席出來なかつた中支派遣軍警部隊主計少尉の山中英夫君、出張の豫定を態々繰下げて出席せられた華中鐵道の榎井君、軍報導部の堀田君などの意氣と熱意に動かされるもの妙なからざるものがあつたが、稀に見る盛會に各自愈々この結束を固くして母校萬歳を三唱散會したのが九時半であつた。

當日出席者は左の通り

- 忽那文治郎 梶川多三郎 辻野丈治
大森元二 堀田 勇 矢野小十郎
風神 茂 寺尾全一 太田英二
原末藏 横塚 大 秋井 一
河田千代治 大野成孝 川上嘉三
高木賢男 山中英夫 内田寛了
手島光彦

千里山昭八會の集ひ

十一月二十二日美津濃七階に於て久々の昭八會を開催、本莊鐵次郎先生を聘し、鹿田弘應、美吉克之助、池田政一、北村文之助、北元正勝、西川潔、西井晴一、福原稔、藥師寺公臣、筒井榮一、長澤健二、宮地正一、尾下瀧三、小田切西、岡本健吉、高尾省三、朝川二三男、多賀恒一、濱田賢、山内喜一郎、大島武夫參集の上、共に語り親睦を重ねると共に同窓出征の將士思出會を開催した。

法曹千里會

學部出身の辯護士を以てなる法曹千里會は去る十一月二十三日校友總會終了後の午後五時より堂島鶴家に總會を開催、會則變更と共に

會長 上田清 副會長 福西新右衛門

幹事 河本尙 藥師寺公臣

の新役員を決定し益々結束を固くして決戦體制下その職域に萬全の御奉公を期して散會した。

尙現在會員は播磨茂、春原源太郎、川上主一、河本尙、樺本信雄、米田恒治、

- 武田友又、浪江源治、植田完治、上田清、
上野俊彦、安富敬作、藥師寺公臣、松村
勘次、福岡彰郎、福西新右衛門、喜島秀
太郎、島巢新一、栗木義重、岸井八束、
澁川鶴藏の諸君である。

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年數、算用數字は昭和年數を示す、又括弧内にある消息は、業務動靜

大法

藤 隆一(12) 大分市上野町鐵道官舎

(門司鐵道局大分保線事務所事務係

長)

岡本 敬次(7) 新三郎と改名 兵庫縣

川邊郡小濱村川面鶴野(西區江戶堀

五、セントラル・ハウス)

勝部嘉久藏(8) 南河内郡國分村新町

神田 哲夫(9) 兵庫縣多可郡西脇町并

土八四七

河野 英一(8) 住吉區豊江西四ノ三八

木下 庄一(7) 西宮市本町二八

喜多省三郎(8) 東淀川區國次町四一四

菊田段太郎(3) (東京市麹町區内幸町、

三和信託會社丸之内支店相談掛長)

北元 正勝(8) 兵庫縣武庫郡鳴尾村砂

子五ノ二(大阪少年審判所審判官)

小堀 登(13) (厚生省東京簡易保險

支局大阪第二課)

佐々木高明(11) (神戸市高羽青年學校

教授)

坂上 吳郎(8) 尼崎市北杭瀬前二八

重田 政次(6) 葦中市川端町一二(臺

灣總督府内務局土木課臺中州駐在)

下井 六郎(16) 廣島縣高田郡甲立町下

甲立五一四

新谷 信興(15) 威鏡北道會黨郡會黨邑

二洞九五

田中 重一(4) (業界統合により日本

通運會社大阪支店)

虎尾 謙一(13) (神戸市神戸區榮町通

三ノ一、三和信託會社神戸支店)

西田

晴男(10) 豊中市南森木二九七

(辯護士)

濱田 實(8) 兵庫縣武庫郡本庄村深

江七〇九

藤原 守(10) 高松市南龜井町四六

(三和信託會社高松支店)

森岡 正典(14) (森岡商會社)

山口 勇(16) 東京市牛込區若松町一

三八、長尾文吉方

吉田 一郎(8) 南河内郡藤井寺町岡

吉田 毅(16) 京都府何鹿郡綾部町綾

部四〇

大 哲

上田 治雄(10) 三島郡茨木町宮元町

(第一相互會社營業部)

大 經

梶斐 末人(16) 日立市平澤寮内一ノ九

石井 晃男(10) (大阪貯蓄銀行難波支

店)

石本 武雄(3) (新京特別市北安路五

〇六、東洋紡績會社新京事務所)

小川 立朝(15) 大連市霞町二〇〇

岡澤 卓郎(8) 吹田市糸田町三三三

田中 友幸(10) 大阪市北區同心町一ノ

一五、村橋方(東京市世田谷區喜多

見町一〇〇、東寶映畫會社東京撮影

所)

田中 又三(4) (朝鮮咸北慶興郡阿吾

地邑灰岩洞一八、日寧運輪會社灰

岩支店)

田中 正長(9) 西淀川區傳法町北四ノ

谷山 清喜(15) (黃海道鳳山郡文井面

御水里二〇二、明治鐵業會社沙里院

炭礦) 平尾 績(16) 神戸市林田區片山町五ノ八

増田 財(16) 高知縣安藝郡室戸町、泉井安吉方

大 南 下野英三郎(14) 北河内郡枚方町阪五八(枚方町立青年學校長)

山村善五郎(明45) 兵庫縣武庫郡山田村 西小部

角谷 利之(8) 堀部欣昭と改姓名 和歌山縣伊都郡橋本町東家(公證人角谷榮治郎役場)

永田 德樹(11) 神戸市葦合區熊内町三ノ二五ノ八八(東亞必需品輸出組合神戸支部)

西川 一郎(16) 神戸市須磨區西垂水町二二四一ノ二三三

正木 正榮(9) (神戸製鋼所厚生部教養課)

山口 靜男(12) 旭區赤川町五ノ一二八

山下 博(16) 北區東野田町七ノ七一

横山 茂樹(14) 新東特別市同治胡同 政府第六代用官倉南湖寮三一三(滿洲國國務院官備局第二科)

秋田 政一(6) (東海銀行本部業務課 第四課)

綱谷 晴夫(6) 和歌山市和歌浦西之町 一二九九(住友銀行和歌山支店)

東 正實(11) (廣島市水主町三三、廣島縣耕地圖)

有家 廣次(三) 北河内郡交野町倉治一三四八

亥野 加吉(2) (平壤商工會議所調査課長)

内丸 邦彦(11) (鹿児島縣分專賣局) 加藤 保(6) 豊橋市馬見塚町馬見塚一五八(東海銀行豊橋本町支店)

川崎 政勝(9) 吉林市朝陽區大和町八 經路八三ノ一(吉林公署民生廳勞務科)

五島 進(11) 旭區生江町七ノ二二二 坂田 孝(6) (鹿児島市山下町三七、東洋金屬會社)

笹原 圭三(7) 西成區玉出新町二ノ五 清水 賢作(9) (奉天市鐵西區興工街一段八號、太陽和紡會社)

關 茂(12) 旭區森小路南一ノ一二 九、野木方(大阪市役所社會部)

高原 孝吉(五) 島根縣美濃郡石見町、大和紡織石見人絹工場) 泥 五六(9) (神戸市灘區成徳青年學校教諭)

長尾 音吉(2) 東京市大森區入新井三ノ一四三、上越銅山本社(同社新瀉事務所長)

橋本 嘉穂(14) 小阪と改姓 和歌山縣海草郡龜川村且來二五二(和歌山縣調整課)

早川 忠久(7) 岡崎市六供町甲越一三 平賀 松男(三) 神戸市灘區大和町五ノ六七ノ五

福富 大吉(14) (泉南郡貝塚町、寺田紡織工廠) 松岡 邦武(13) (北支泰安道新民會總務課長)

宮崎 政善(2) (鐵工業三星製作所主) 專 二・經 龜川 元宥(八) (東邦アルミナ鑛業會社)

竹内 建雄(16) 滿洲國奉天省營口市大和區神明街五〇(營口紡織會社)

富田 英雄(四) 南京市中山東路一七〇 (國民政府宣傳部中央書報發行所協理、新中國報社顧問)

西村 貞雄(9) (工具商自營) 森水 政利(12) 三島郡芥木町東宮元町一三三五

生島 祥行(11) 神戸市須磨區潮見臺町五ノ五二 石本 武雄(3) (新京特別市北安路五〇六號、東洋紡織會社新京事務所)

小野 公生(11) (中河内郡加美村、早川金屬工業會社官庫課) 大石雄一郎(二) (興亞商工會社代表取締役)

大西 秀雄(四) 兵庫縣氷上郡柏原町 (柏原國民職業指導所長) 與河佐喜喜(四) 東京市世田谷區北澤三ノ九〇八(日本石油會社)

加藤 健次(9) 兵庫縣武庫郡住吉村 野一三五二〇(三興會社) 柿本松次郎(7) 京城市三坂通一二三(東洋工業會社京城出張所主任)

藤田末治郎(10) (東淀川區野中南通三、大友ビストロン製作用所) 松永 三郎(二〇) (兵庫縣出石郡神美村、日本産金振興會社神美製鍊所事務課長)

大橋 義男(16) (中華民國安徽省蕪湖、日本國民學校) 專 國 谷口 弘(6) 東京市板橋區線馬南町

真雁 正(10) 大連市神明町七〇(大阪商船大連支店)

木下大次郎(16) 神戸市林田區蓮宮通一ノ五三(帝國鑛業所神崎川工場)

北岡 醇平(二〇) 朝鮮平北江界邑昭和町 忽那文治郎(三) 上海北四川路永豐坊五六(丸加洋行支配人)

笹岡謙四郎(15) 東淀川區淡路新町一五 五 重光 義人(15) 京都市下京區吉祥院船戶町五六、京都機械會社寄宿舍内(同社企務部)

關谷 祐展(二) (福井市立和田青年學校教諭) 中島 政徳(14) (滿洲國嫩江縣嫩江街、滿洲拓植會社出張所)

改 姓 名

昭七 大法 岡本 敬次 岡本新三郎 昭八 專一 商 角谷 利之 堀部 欣昭 昭十四 專二 法 橋本 嘉穂 小阪 嘉穂

訃 音

中村 鐵藏(明34法) 十一月四日午 後四時三十分逝去

國枝 靜也(昭8大法) 柴田 昌雄(昭8大法) 西岡 作次(昭8大法) 橋本 智夫(昭8大法) 以上四氏の逝去、昭八會大島幹事より通知あり

稻井 萬吉(昭12大法) 十二月四日 午前零時四十分逝去

幸 武夫(昭11專二經) 昭和十五年 年六月病氣ノタメ逝去

淺野 穂(昭13專一法) 戦病死

大阪區裁判所 調停主任 稻井義夫著

新刊 調停讀本

B 六・二三八頁
價 一・八〇錢
送 一〇錢

本書は我國裁判所に於ける現行各種調停制度を平易、簡明に纏り良く叙述したるものにして、理論に走ることを避け實務上の取扱に重きを置いたもの。一般實務家、調定委員必讀の書である。然し、本書は早近なる通俗書では無い。其の現行法に基きたる理路整然たる解説は法律専門家に一指針を與へるものである。

主 要 目 次

第一章 緒論 第二章 調停制度の長所 第三章 調停制度の種類 第四章 調停の目的物 第五章 管轄 第六章 調停機關、調停附屬機關、調停補助機關及び調停共助機關並に勸解者 第七章 調停當事者、總代、代理人、補佐人及利害關係人 第八章 調停手續 第九章 調停不公開 第十章 調停手續の開始 第十一章 調停手續の進行 第十二章 調停手續の停止 第十三節 調停手續の終了 第十四章 調停成立の效果 第十五章 調停記録の閲覧若は謄寫及其の正本、謄本、抄本 第十六章 調停費用 第十七章 調停委員會の仲裁判斷 「附録」第一部 主要調停關係法規 第二部 各種調停申定書式

發 兌 元

大阪市北區會根崎上三丁目八 振替大阪三一九七二番
東京市神田區駿河登三丁目五 振替東京八一三三八番

大阪商工會議所 經濟法規相談所 法學士 中村正二著

新刊 有限會社實務の手引

價 一・八〇
一・二四

企業合同と云ふことは近來の重要事である。蓋し國家勢力を最有效果に發揮せねばならぬからである。而して有限會社は企業合同の形態として最も新しい形態であり又最も簡易にして便利な方法である。本書は其の設立手續を分り易く説明したものである。

質疑應答 大阪商大 教授 陶山誠太郎編著

製造工業原價計算の解説

價 一・七〇
一・一〇

— 適正原價は製造工業の生命線である —

製造原價を決定するものは言ふ迄もなく原料、賃銀、間接費等である。製造原價の低減は何により得らるゝやと云ふに、冗費の節約に負ふ所極めて大である。合理的なる冗費の決定こそ原價計算の基礎を爲す。此點は所謂適正原價に於ても同様である。先に企業院に於て製造工業原價計算要綱草案の發表せらるゝや、各方面に多大の關心を誘致し其の解説書の要望大なるものがある。蓋し適正原價は製造工場の生命線であるからである。

株式 會社 大同書院

黃 警 頑 著
大 川 周 明 序
左 山 貞 雄 譯

上製・箱入
定價 一・八〇
送料 一四

華僑問題と世界

最新刊
華僑問題は昨今の日本に於て既に論議される様になつた。今後も尙一層華僑問題は専ら政策上の重要問題として本格的に検討されるものであらう。本書は黄警頑の「華僑對祖國的貢獻」を譯出したものであるが、事變後、華人のものとした華僑論として意義がある。原著者の論調には些さか日本人の神經に觸れるものもあるが、賢明な讀者は正しく咀嚼されるであらう。併し結論に英・米・蘭華の狡猾に一矢を酬ひてゐることは、亞細亞人たるの自覺の萌芽として見逃せないものがある。

東亞同文書院
大學講師 高木道信 著
定價 二・三〇
送料 一四

支那重要資源の研究

新刊
◆本書は支那商品唯一の解説書である。
理化學の實驗的手段に依る物質の究明から、一步一步支那の真相を究めんとする。支那物質の自然科學的考察は之は頗る迂遠に似たるも、本書は此點他の何物よりも比較的正確に事象を把握し得べく、同時に將來支那物質の科學的検討を基礎として商品の合理化を計つた。

◆經濟特殊研究叢書◆

- (一) 東京帝國大學元教授 矢内原忠雄著
帝國主義下の印度 價二・五〇
- (二) 關西大學教授經濟學博士正井敏次著
金 融 論 研 究 價二・五〇
- (三) 京都帝國大學助教授 堀江保藏著
日本資本主義の成立 價二・五〇
- (四) 小樽高等商業教授 南 亮三郎著
人口理論と國際貿易 價二・五〇
- (五) 大阪商科大學教授 堀 經夫著
地 代 論 史 價二・五〇
- (六) 長崎高等商業教授 伊藤久秋著
經濟思想と學說 價二・五〇
- (七) 經濟學士 吉田秀夫著
新マルサス主義研究 價二・二〇
- (八) 關西大學教授 森川太郎著
銀行職能論 價三・三〇
- (九) 神戸商科大學教授 丸谷喜一著
價值及價格研究一斑 價三・〇〇
- (十) 高松高等商業教授 岩井 茂著
異說貨幣論研究 價三・八〇

發兌 大同書院

大阪市北區梅田新道 東京駿河臺中大前
振替大阪三一九七二番 振替東京八二二三八番

關西大學研究論集

第十一號

各篇A五判一四〇頁
定價 壹圓
送料 十二錢

法律・政治篇

(昭和十六年十二月發行)

國家權威の分析

岩崎 卯一

國務と統帥と軍政との關係
並にその調整

吉田 一枝

ダストルグ中立の形成
—その歴史的並に政治的斷面—

川上 敬逸

共犯論への一考察

植田 重正

ナチスに於ける
家庭生活の新體制

福島 四郎

株主議決權の箇數につて

野村 次夫

組織 契約

國藏 胤臣

經濟・商業篇

(昭和十六年十二月發行)

財政の使命と其の達成
—財政金融基本要綱に觸れて—

神戶 正雄

計畫經濟論序說

正井 敬次

貨幣理論の課題

森川 太郎

フロイゲルスの政治經濟學

赤羽 豐治郎

中小商業の統合に就て
—統合の形態と必然性—

加藤 金次郎

明治中期取引所制度概要(上)

佐伯 三郎

株價對策と
日本協同證券の役割

三木 純吉

文學・哲學篇

(昭和十六年十二月發行)

廟制 考(一)

岡本 勝治郎

蘆庵と景樹(下)
—用語論を中心として—

安川 安太郎

文藝批評の困難

片岡 甚太郎

「ヘンリー四世」に現はれたる
フォルスターフに就いて

山田 松太郎

Canterbury Tales 説話中の
digestion に(上)

廣瀬 捨三

人間研究と人間主義の基底
—Aldus Huxley の
After Many A Summer に(上)

堀 正人

新刊

關西大學學報第百九十五號

昭和十七年一月一日發行

關西大學學會

吹田市千里

電話 吹田一三二番
振替 大阪一八七五番